

小学校におけるユニバーサル授業実践に基づいた 特別支援教育の確立に関する研究

高知大学大学院 総合人間自然科学研究科 教育学専攻特別支援教育コース 是永研究室 是永かな子
四万十市立具同小学校 教諭 宮上美智子

1 はじめに

平成24年12月に文部科学省が公表した、「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」によると、学習面または行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合は、全体の6.5%という数値が報告され約66万人に何らかの支援が必要だと捉えられている。今日の教育現場が抱える喫緊の課題として、小学校においては、通常の学級担任が発達障害等のある子どもへの特性に応じた指導・支援に悩んでいる現状がある¹。授業中の私語、立ち歩き等がみられ、教員の経験年数に関係なく授業が成立しない、または、学級が崩壊していく事例が多くなっている。今まで培われてきた指導力のみでは太刀打ちができず、困ったり疲れ果てていたりする教員も少なくない。これは、子どもの努力不足や保護者のしつけが原因ではなく、障害の特性に起因するものと捉え、子どもの実態に即した指導や支援を行うことが大切になる。しかし、担任一人の力で、全体指導の中で個別に支援することには限界もある²。だからこそ、子どもたちが一日の大半を過ごしている日々の授業において、子ども一人ひとりの特性をふまえ、ユニバーサルデザインの視点に立った誰にとっても分かりやすい授業づくりが求められている。

2 研究の目的

本研究では、小学校の通常の学級におけるユニバーサルデザインに基づいた授業づくりによる特別支援教育の確立について、1小学校に注目し考察する。具体的には、授業観察や学習指導案を作成しながら授業改善を行い、どのような支援が必要かを検討する。また、「ユニバーサルデザインに基づいた授業づくりチェックリスト」や「SDQ アンケート」を行い、教員や子どもの変容について考察する。

3 研究内容

(1) 対象

特別支援教育に取り組んでいるD小学校の教職員と子どもを対象に研究する。特に、一つの学級に介入し、学習面・行動面につまずきのあるA・B・C児を中心に集団と個別の支援を検討する。

(2) 方法

平成26年4月～平成26年12月まで、毎週1回学校を訪問しながら以下に取り組んだ。まず、ユニバーサル授業実践の前に児童観察・実態把握を行った。次に、授業改善を視点に置き日々の授業を観察後、「子どもたちの良いところ」や担任の良かった支援や考えられる支援について検討し、授業記録として残した。研究授業の教材研究や学習指導案作成にもかわり、授業評価表の分析を行った。また、子どもたちの特性に合った教材・教具についても検討した。アセスメントとして、「ユニバーサルデザインに基づいた授業づくりチェックリスト」を全教員対象に4月と11月に行い、その変容をみた。また、「SDQ アンケート」を全教員、5・6年児童、保護者を対象に5月に実施し、子どもたちの支援ニーズを把握したうえで、それぞれに合わせた支援を続けた。11月に2回目の「SDQ アンケート」を行い、支援ニーズの変容をみた。個別の指導計画については、全学年で作成に着手した。

(3) 内容

ア 授業改善

E学級の実態として、好奇心旺盛で元気いっぱいの子どもたちであるが、基礎学力の定着と子どもたちの特性に合った授業展開に課題がみられた。また、授業に集中できにくく勝手な言動が多いA児や手遊びが多く授業のスタートがそろにくいB児、学習内容の理解に苦戦しているC児に重点的な支援が必要であることが確認された。そこで、一人ひとりに活躍の場面があり、「分かる」「できる」という達成感のもてる授業づくりをめざして授業改善に取り組んだ。

さらに、放課後、担任と1日の授業のふり返しを行い、よりよい支援について検討した。「子どもたちの良いところ」を集団とA・B・C児について確認し、担任の良かった支援と考えられる支援について話し合いながら授業記録に残し、次の日の授業に活かしていく方法をとった。

表1 授業記録の一部

クラス・子どもの良いところ	頑張してほしいところ・行った支援○(TT)	支援方法(良かった支援◎考えられる支援・)
<ul style="list-style-type: none"> ・ペア対話のときの表情がよく、ノートを見せたり、指さしたりしながら説明できる。 ・Bは、うれしそうに指さししながら話す。 ・Cは、話型にそって話す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・聞いた後は、反応する。 ○「わかりました。」「私と同じです。」「私と似ています。」「なぜ～ですか。」を返すと分かりやすいことを伝える。 ・Aは、ペア対話にとりかかりにくい。 ○順番を決めて取りかからせる(廊下側から、校庭側から)。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎「ペア対話、上手になってきたね。」や「指さししながら」「ノートを見せながら」等、具体的に話したので、子どもたちが行動に移せた。【評価の工夫】【活動内容の工夫】 ◎人とのかかわり場面をつくる。【活動内容の工夫】(SDQで「向社会性」High Need、「多動・不注意」High Need) ・聞き終わったら、必ず反応する約束をつくる。

このように、話し合ったことをすぐに実践する担任の授業は、日々変化していった。最初は、黒板からあまり離れることなく授業が展開され、子どもたちに注意する言葉が多かったが、子どもたちのそばに行き、できているかどうかを確認したり子どもとやりとりしたりしながら机間指導することが増えた。また、子どもたちの良いところを見つけ褒めることが多くなっていった。さらに、学習活動の提示で見通しを持たせたり名前を呼んで説明したりするなど、子どもたちの特性に合わせた授業展開が工夫されていった。

(ア) 研究授業

学習指導案の中に、「予想される児童のつまずき」と「ユニバーサルデザインを取り入れた支援」として高知県教育委員会が作成している『すべての子どもが「分かる」「できる」授業づくりガイドブック』³の中の5つのユニバーサルポイント【環境の工夫】【情報伝達の工夫】【活動内容の工夫】【教材・教具の工夫】【評価の工夫】等について明記し、ニーズの高い子どもを想定した重点的支援を行った。

表2の形式で学習指導案を作成し、7月に研究授業を行った。授業後の研究協議は、小グループに分かれ、5つのユニバーサルポイントにそって話し合ったあと全体で共有した。良かった支援として、黒板前面がすっきりしていることや学習活動の提示により見通しが持てたこと【環境の工夫】、板書の文字の大きさやノート指導【情報伝達の工夫】、具体物(飴)の利用

【教材・教具の工夫】、ペア学習や発表の型の提示【活動内容の工夫】、肯定的な評価やつぶやきへの評価【評価の工夫】が出された。課題としては、学習規律の徹底や思考できていない子どもへの手立ての工夫等が確認された。

表2 算数科学習指導案 本時の展開の様式

学習活動		予想される児童の つまずき	指導上の留意事項 ※ユニバーサルデザインを 取り入れた支援	評価基準 ◎評価方法
つかむ	1			
		めあて		

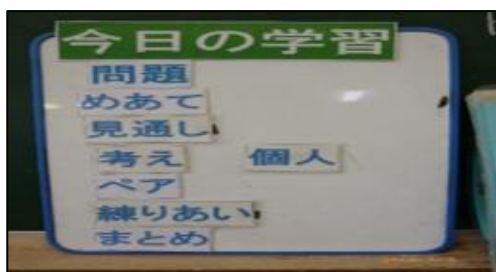


写真1 学習活動の提示

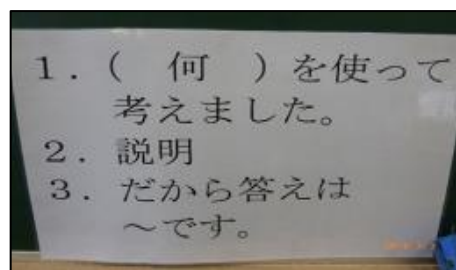


写真2 ペア学習の話型

また、研究授業終了後、参観者に授業評価アンケートを実施した。この授業評価アンケートの項目は「ユニバーサルデザインに基づいた授業づくりチェックリスト」の20項目のうち5つのユニバーサルポイントから2項目ずつ選んだ合計10項目について、5件法で記入するものである。参観者からは肯定的な回答が多かったが、「次の課題を事前に準備するなど、理解が早い子どもへの対応や見通しを持たせる工夫をする」【活動内容の工夫】、「身近なものから教材を見つけるなど、子どもがイメージしやすい工夫をする」【教材・教具の工夫】、「行動の直後の評価や机間指導などで個別に賞賛や注意を行う」【評価の工夫】については、否定的な回答がみられたので、今後の課題とした。

子どもたちの授業評価アンケートでは、肯定的な回答が多い反面、否定的な回答がどの項目にもみられた。とくに、「早く勉強が終わったときには、次にすることを見せてくれる」【活動内容の工夫】、「パソコンや電子黒板などを使って分かりやすくしてくれる」【教材・教具の工夫】、「授業中に、わたし(ぼく)に声をかけたりしてくれる」【評価の工夫】については、否定的な回答が多かったので肯定的な回答へ移行する手立てが必要である。

(イ) 観察授業

これまでのユニバーサル授業実践の年度途中の現状をみるため、管理職、高知県教育委員会特別支援教育課指導主事らの参観のもと算数科の観察授業を11月に実施した。とくに、予想される児童のつまずきに対して、5つのユニバーサルポイントを活用しながら支援策を考えた。実際の授業もICTを活用して意欲づける【教材・教具の工夫】、授業のスタート時に活躍場面を作って参加させる【活動内容の工夫】、既習内容を想起させる【情報伝達の工夫】等、集団とA・B・C児を想定した個への支援を行いながら展開された。課題となっていたICT活用については、

パワーポイントを作成し導入部分で使用することや、実物投影機を使って子どもたちの考え方を発表することを取り入れた。作成したパワーポイントの一部は次のとおりである。



図1 作成したパワーポイントの一部

研究協議では、授業がパターン化されテンポがよい【環境の工夫】、ICTの活用で意欲の向上がみられた【教材・教具の工夫】、即時評価や机間指導が効果的である【評価の工夫】という成果が出された。1時間の授業を通して、子どもとのやりとりや指示の出し方等、子どもの実態に即した指導・支援がなされていた。子どもを褒めながら学習意欲を高めることができおり、担任の授業スタイルの変容がうかがえた。

一方で、授業のねらいの明確化やワークシートの作成、子どもたちの話の聞き方に課題がみられた。さらに、教材研究を深め、子どもの実態に応じたためあての提示、子どもたちの理解につながるワークシートの作成、話を聞くための具体的な手立てについて検討する必要がある。

参観者4名の授業評価は、肯定的な回答が増えた。否定的な回答は、理解が早い子どもへの手立てにおいてみられた。これは、学習指導案では、チャレンジ問題を提示する予定であったが、時間がなくなり提示できなかつたためである。全員の学習空白をなくすためにも、授業の時間配分が大切であるということを確認した。

子どもの授業評価の「そう思う」について、介入前と比較し変容が大きかった項目は、「質問や説明を分かりやすくしてくれる」が10人から14人へ、「パソコンや電子黒板などを使って分かりやすくしてくれる」が6人から13人へ増加している。短い文章で要点をしぼった話し方やICT活用で、授業が分かりやすくなっていることがうかがえた。

(ウ) 教材・教具づくり

2学期は、子どもたちのつまづきを想定し特性や長所に合わせた教材・教具づくりにも取り組んだ。「かけ算のひっ算」では、視覚教材(目で見て分かる筆算の手順カード)と聴覚教材(筆算の手順を声に出して読んでから問題を解く)を作成した。また、子どもの得意な感覚を使うことの良さを、1学期と2学期の単元テストの結果を比較して考察した。

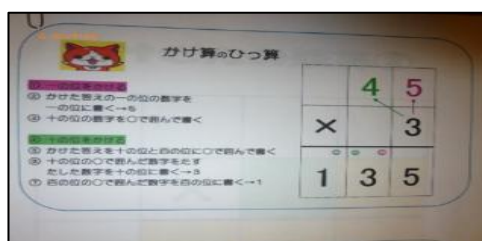


写真3「かけ算のひっ算」での視覚教材

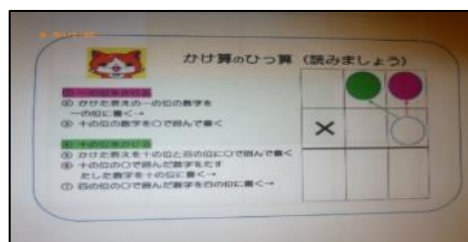


写真4「かけ算のひっ算」での聴覚教材

表3 単元テストの平均点の比較

1学期	単元名	①かけ算	②時刻と時間	③わり算	④円と球	⑤たし算とひき算の筆算	⑥あまりのあるわり算	平均
	平均点	86	76	84	71	85	77	79
2学期	単元名	①大きい数のしくみ	②かけ算のひっ算	③長いものの長さ	④小数	⑤三角形	⑥分数	平均
	平均点	89	85	92	86	77	81	85

2学期の単元テストの平均点は、1学期より6点高くなっていることがわかる。実際に、児童の実態に即した教材・教具を作った単元は2学期の①大きい数のしくみ②かけ算のひっ算④小数であるが、いずれも平均点が85点以上になっている。平均点が一番高かったのは2学期の「長さ」の単元であるが、この単元では、実際に巻尺などを使った測定やグループでの活動が展開され、友だちとかかわりあいながら、いきいきと楽しそうに学習する子どもたちの姿が見られている。このことから、【教材・教具の工夫】だけではなく【活動内容の工夫】による基礎学力の向上も期待されるものと考察する。一方、図形領域の平均点が低いことがわかり、視覚的な支援の必要性が確認された。

イ 「ユニバーサルデザインに基づいた授業づくりチェックリスト」の結果と考察

全教員を対象に4月と11月に「ユニバーサルデザインに基づいた授業づくりチェックリスト」を行い、意識の変容をみた。4月と11月の回答の比較は、表4のとおりである。

表4 チェックリストにおける4月と11月の比較 (n=11)

環境の工夫	常に意識している		少し意識している		どちらともいえない		あまり意識していない		全く意識していない	
	4月	11月	4月	11月	4月	11月	4月	11月	4月	11月
教室の前には一切掲示物をしない	6	8	5	3	0	0	0	0	0	0
座席の位置は子どもの状態を考慮して教師が確認する	7	9	4	2	0	0	0	0	0	0
1時間の授業の流れを視覚的に提示する	3	2	4	8	2	1	2	0	0	0
授業の始めや途中に学習に必要なものが出されているか確認する	4	7	6	3	1	1	0	0	0	0
学習姿勢や学習規律を具体的に指示する	3	7	8	4	0	0	0	0	0	0
情報伝達の工夫	常に意識している		少し意識している		どちらともいえない		あまり意識していない		全く意識していない	
アイコンタクトを取りながら具体的に明確な説明をする	4	7	6	4	1	0	0	0	0	0
板書や絵、写真、具体物等の視覚支援をする	3	8	8	2	0	1	0	0	0	0
文字の大きさや量を考慮する	3	8	8	3	0	0	0	0	0	0
授業の流れが分かる板書にする	2	6	8	5	1	0	0	0	0	0
活動内容の工夫	常に意識している		少し意識している		どちらともいえない		あまり意識していない		全く意識していない	
授業の進め方にパターンを決めている	3	6	5	4	3	1	0	0	0	0
「動」と「静」の活動を組み合わせるなど授業にメリハリをつける	4	5	4	5	3	1	0	0	0	0
次の課題を事前に準備するなど、理解が早い子どもへの対応や見通しを持たせる工夫をする	0	2	7	6	4	3	0	0	0	0
具体物の操作や体験的な学習を取り入れるなど、多様な感覚を使う工夫をする	3	5	7	3	1	3	0	0	0	0
ペア学習、グループ学習を取り入れるなど、児童生徒同士が関わり合い、学び合い、教え合う場を設定する	3	6	8	2	0	3	0	0	0	0
教材・教具の工夫	常に意識している		少し意識している		どちらともいえない		あまり意識していない		全く意識していない	
ワークシート等を活用する	1	3	8	7	2	1	0	0	0	0
身近なものから教材を見つけるなど、子どもがイメージしやすい工夫をする	2	7	8	3	1	1	0	0	0	0
ICTの活用など、学習内容が理解しやすくなる工夫をする	2	2	3	5	5	4	0	0	1	0
評価の工夫	常に意識している		少し意識している		どちらともいえない		あまり意識していない		全く意識していない	
具体的で子どもに伝わる方法で褒める	7	6	2	5	2	0	0	0	0	0
〇印を入れる、シールを貼る、結果をグラフ化するなどの視覚的な評価をする	6	6	4	3	1	2	0	0	0	0
行動の直後に評価を行うなど、机間指導も活用して個別に賞賛や注意を行う	4	9	7	2	0	0	0	0	0	0

上記のように、否定的な回答から肯定的な回答への移行や肯定的な回答の増加がみられ、教員の意識の向上がうかがえる。この結果から、日々の授業の中にユニバーサルデザインの観点を取り入れられ、子どもたちへの的確な支援が行われていることにより、子どもたちの支援ニーズも低下しているものとする。

ウ SDQ アンケートの結果と考察

SDQ アンケートとは、子どもの行動のポジティブな面とネガティブな面を評価するための信頼性の高いスクリーニング法である。78言語に翻訳され、世界的にも根拠がある質問紙とされている⁴。質問は、全25項目で①行為面②多動性③情緒面④仲間関係⑤向社会性の5因子について、「あてはまる」(2点)、「まああてはまる」(1点)、「あてはまらない」(0点)、の中から選んで印を付ける。5因子における支援の必要性を「Low Need:ほとんどない」「Some Need:ややある」「High Need:おおいにある」の3つに分類する。さらに、行為面、多動性、情緒面、仲間関係の4因子

の合計を算出し、全体的な支援の必要度「TDS」を把握するものである。このアンケートを、5月に教員、保護者、5.6年児童を対象に実施し、支援ニーズに合わせた支援を検討・実践した。11月に2回目のアンケートを実施し支援ニーズの変容をみた。1回目と2回目の支援ニーズ別の人数比較は次のとおりである。

表5 SDQ アンケートの各因子の支援ニーズ別の人数比較 (n=102. n=42)

因子	行為	多動・不注意		情緒		仲間		向社会的性(高いほどよい)		TDS(総合困難得点)			
		1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目		
T(教) 102名	H	4	2	35	27	12	6	5	7	53	30	15	5
	S	3	0	9	5	5	9	7	2	18	29	8	12
	L	95	100	58	70	85	87	90	93	31	43	79	85
P(保) 102名	H	6	10	19	16	13	10	6	7	18	18	13	15
	S	6	6	10	14	0	9	2	6	15	23	14	12
	L	90	86	73	72	89	83	94	89	69	61	75	75
S(児) 42名	H	0	0	4	3	11	7	0	2	7	8	1	2
	S	1	1	3	5	0	6	0	12	10	11	5	4
	L	41	41	35	34	31	29	42	28	25	23	36	36

「多動・不注意」では、High Needが8名減っている。授業の中では、座席の工夫【環境の工夫】や課題のスマールステップ化【教材・教具の工夫】を図って支援している。また、ペア学習を取り入れる【活動内容の工夫】等の活動に変化をもたせる支援で、集中を持続することができたのではないかと。その結果、「TDS」も15名から5名へと減少している。

また、E学級のSDQアンケートの1回目と2回目の支援ニーズ別の人数比較と、A・B・C児の変容については次のとおりである。

表6 E学級におけるSDQアンケートの各因子の支援ニーズ別の人数比較 (n=23)

因子	行為	多動・不注意		情緒		仲間		向社会的性(高いほどよい)		TDS(総合困難得点)			
		1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目		
T(教)	H	1	1	13	3	1	0	0	2	23	1	2	1
	S	0	0	3	2	0	1	2	0	0	14	2	1
	L	22	22	7	18	22	22	21	21	0	8	19	21
P(保)	H	2	3	5	2	2	1	2	1	4	7	4	2
	S	2	0	3	6	0	1	0	1	6	3	3	1
	L	19	20	15	15	21	21	21	21	13	13	16	20

表7 A・B・C児 SDQアンケートの各因子の得点と支援ニーズ (n=3)

児童	因子	行為		多動・不注意		情緒		仲間		向社会的性(高いほどよい)		TDS(総合困難得点)	
		1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
A	T(教)	7 H	7 H	8 H	7 H	2 L	1 L	3 L	3 L	1 H	3 H	20 H	18 H
	P(保)	5 H	6 H	7 H	8 H	1 L	2 L	2 L	2 L	7 L	3 H	15 S	18 H
B	T(教)	1 L	0 L	7 H	3 L	0 L	0 L	1 L	1 L	4 H	7 L	9 L	4 L
	P(保)	2 L	1 L	3 L	4 L	0 L	0 L	4 S	4 S	8 L	8 L	9 L	9 L
C	T(教)	2 L	0 L	7 H	7 H	5 H	1 L	2 L	2 L	1 H	5 S	16 H	10 L
	P(保)	3 L	2 L	7 H	7 H	4 S	1 L	1 L	1 L	5 S	7 L	15 S	11 L

E学級の教員評価において「多動・不注意」のHigh Needの人数が13人から3人へ、「TDS」においても1名減少している。また、A児は、支援レベルは同じだが得点が下がっている。B児は、「多動・不注意」では、High NeedからLow Needに支援レベルが下がっている。C児は、「情緒」と「TDS」においてHigh NeedからLow Needに支援レベルが下がっている。これらの結果は、学習活動を示して見通しをもたせたり、短い時間で活動内容を変えたりなど、子どもの実態に合わせてながら授業を展開していったことで安心して授業に臨めたものと考えられ、ユニバーサル授業実践の効果であるといえるであろう。

4 まとめ

(1) 成果と課題

ユニバーサルデザインに基づく授業づくりに取り組むことで、教員の意識や子どもを見る視点が変わり、授業改善につながっていった。個への支援により、重点的支援対象であった子どもも、授業参加の意欲や授業態度、友達とのかかわりが改善された。A児は、名前を呼んで指示を出したり授業の最初に活躍場面を作ったりすると集中の持続がみられた。B児は、座席を前にし、やりとりをしながら進めることで授業に参加できた。C児は、スモールステップで提示し褒めながら対応すると自信をつけることができた。また、集団への支援により、学習活動の見通しをもち、担任とアイコンタクトをとりながら安心して授業に臨み、となりの友だちにそっと指さしをしたり分からないことを聞いたりする関係が生まれてきた。このように、子どもの特性に合った的確な支援によって、子どもたちはいきいきと活動し「自分でできた」「みんなとできた」という達成感を持つことができた。単元テストの平均点の上昇もユニバーサル授業実践の一定の効果であると考えられる。あわせて、SDQ アンケートで支援ニーズを把握し、それぞれの実態に応じた支援を行うことで支援ニーズが下がったことも成果であろう。

校内支援体制についても、校内支援体制チェックリストを校長先生に依頼し4月と11月に実施した。その結果は、次のとおりである。

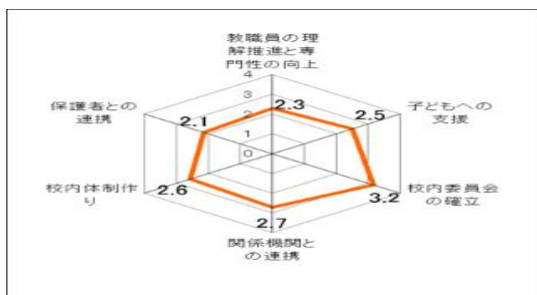


図2 校内支援体制（4月）

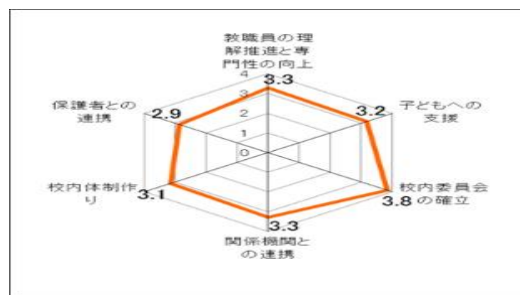


図3 校内支援体制（11月）

各項目において平均点の上昇がみられ、ユニバーサル授業実践に取り組んだ成果であると考えられる。今後の授業改善の課題は、子どもたちの考えをみんなで共有したり認め合ったりすること【活動内容の工夫】に重点を置き、意図的な活動を取り入れることである。さらに、教科のねらいの達成とユニバーサル授業実践を融合させ、学力向上をめざすことが求められる。

(2) 考察

D小学校では、校長先生のリーダーシップのもと特別支援教育を柱に据え、「みんなで取り組む」という学校体制がみられた。このような体制の中で行われるユニバーサルデザイン授業実践は、学校全体へ広がり、すべての子どもたちに「分かる」「できる」という達成感をもたらすことができると考える。また、教員の意識や実践が変わってきたことで、やる気の出た子どもの姿が見られるようになり、テストの平均点も向上した。このように、ユニバーサル授業実践において5つのユニバーサルポイントにそった支援により、子どもたちの学習空白をなくすことができ、より確かに学び合うことで学力の向上が期待できるものと考察する。

<参考文献>

- 1 国立教育政策研究所生徒指導研究センター『学級運営等の在り方についての調査研究（報告書）』2005年。
- 2 本田ゆか・佐々木和義「担任教師から児童への個別行動介入の効果—小学校1年生の授業場面における問題エピソードの分析」『教育心理学研究』56, pp. 1-6. 2008年。
- 3 高知県教育委員会『すべての子どもが「分かる」「できる」授業づくりガイドブック～ユニバーサルデザインに基づく、発達障害の子どもだけでなく、すべての子どもにあると有効な支援～』2013年。
- 4 厚生労働省, Strengths and Difficulties Questionnaire
http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/boshi-hoken07/h7_04d.html